

# 宋代新儒学者における「仁」の意味

李 致 億

## 一、はじめに

孔子の思想の核心であるとされる「仁」の意味を説明することは非常に難しい。「仁」は儒教思想の様々な概念の中でも最も難解な概念だと言える。それが難解な理由は、後代の新儒学の「理」や「太極」といった用語のように、形而上学的で哲学的な意味が深いためではない。かえってそれは、「仁」という概念が私たちの日常と非常に密接なところにあるからである。これはまるで、空気のようにあまりにも密接なものが普段よく認識できないことに例えられるだろう。つまり、「仁」は最も私たちに密接なので、把握しにくいのかも知れない。

「仁」は孔子が非常に強調した徳目である。『論語』の中で「仁」という字は五十八の章にかけて、百九回も登場する。(ちなみに、同じく重要な概念とされる「学」は六十五回、「礼」は七十四回登場する。)もし孔子学派の名前を、「道家」や「法家」のように、その思想の核心的な概念を使って付けるとしたら、おそらく「儒家」という名前ではなく、「仁家」または「仁学」と呼ばれたかも知れない。それだけ孔子思想で大きな部分を占め

るのが、この「仁」である。孔子が弟子たちに説いた人間の標準が仁であり、弟子たちの学問の目標も仁の完成であり、また、後代の多くの儒学者が指向した学問の目的も「仁を求め聖人になる（求仁成聖）」ことだったので、「仁」は儒学の始終だと言っても過言ではない。このように重要な概念であるにもかかわらず、仁の学問の創始者である孔子はその概念に対する定義を下さなかった。この点は古今の多くの『論語』読者を困惑させている原因の一つである。それでは、孔子はなぜ「仁」の定義を下さなかったのだろうか。「仁」は定義できない概念だからか、それとも定義する必要がなかったからだろうか。私はこの二つの理由が同様に作用していると思う。ということは何を意味しているのか。

第一に、「仁」を定義するのは難しい。言い換えれば、「仁」が指す範囲があまりにも広くて包括的だということである。「仁」を現代の用語で表現したものの一つに、「人間らしさ」を挙げることができる。ところで、「人間らしさ」というものはどのように定義できるのだろうか。我々はどのような人を「人間らしい人間」と言えるのだろうか。これを「犬」に例えて、このように質問してみよう。一番犬らしい犬はどのような犬を指すか。犬は自分の主人に従い、主人に忠誠を尽くす属性がある。人間より四十倍優れた嗅覚と、人間より四倍も遠いところの音を聞く聴力を持っている。さらに、二百個以上の人間の言葉を聞き分ける能力も持っている。確かにこういったことが「良い犬」の条件だと言えるだろう。しかし、このような条項を一つの場合でまとめて「犬らしさ」という言葉で要約することは容易ではない。ましてや犬よりはるかに複雑な存在である「人間」はどうだろうか。

第二に、孔子の実質的教育の側面から考えて、「仁」を特定の概念で定義することはそれほど重要なことではなかったと推定される。「仁はこれだ」と定義した瞬間、仁の意味はその言語の中に閉じ込められることになる

だろう。そうすると、その教えを受けた弟子は、そのような特定の意味だけを受け入れて、それだけを仁の基準にしようとするだろう。これはあまり効果的な教育方法ではない。このことを道案内に例えてみると、山の頂上に先に登っている道案内がいると想定してみよう。後から登ってくる人に携帯電話で、頂上の風景だけを説明していたら、その説明を受けて山に登る人はかなり困難を感じるだろう。登っている人がいる地点の目の特徴を説明するのが良いナビゲーターの役割で、最終目的地だけを教えることはあまり効果的な指針にならない。

このような理由から、孔子が弟子たちに説いた仁に対する言説は、仁を行う方法であって、仁の定義ではないということがわかる。しかし、孔子が仁を定義しなかったからと言って、そこに不満を持つ必要はないと思う。むしろ、定義をしていなかったからこそ、後代の学者たちは仁に対する固まった理解ではなく、開かれた姿勢で仁を受け入れることができたのかも知れない。このことにより、仁の解釈は後代の学者の課題として残され、多様な解釈と熱烈な議論が登場するようになったのだから、事実上、孔子の教育は成功だったと言うべきであろう。近くは孟子から遠くは宋代の新儒学者に至るまで、仁に対する実に多様な解釈が下されたのである。まず孟子は「仁」を「人の安らかな家」に例え、「人間の人間らしい心」と定義した。唐代の韓愈（字は退之…七六八〜八二四）は、仁を「博愛」と定義し、宋代の二程兄弟（程明道…一〇三二〜一〇八五、程伊川…一〇三三〜一一〇七）は「万物一体」と「公」を用いて仁の意味を説明した。朱子学の集大成者である朱子（朱熹…一一三〇〜一二〇〇）は「天地生物之心」と「心の徳、愛の理」で仁を説明したのである。

このように多様な方式で解釈・説明されているが、だからと言って、仁の意味が実際に色々と分かれているわけではないだろう。そうでなく、仁が一つの真理であるのなら、このような多様な解釈と説明は一貫性を持たなければならない。そして、その一貫性を見つけ出すことが、まさに我々後代の学者に残された任務であると思

う。本稿ではこのような仁に対する多様な説明の中で、宋代の新儒学者たちの説明を中心に仁の意味を調べ、それがどのような一貫性があるのかを探求してみたいと思う。

## 二、仁は「愛の種」である

樊遲<sup>はんち</sup>が仁について尋ねた。子曰く「人を愛することだ。」知<sup>(1)</sup>について尋ねた。「人を知ることだ。」

『論語』に見えるこの一節は、しばしば「仁」を「愛」と定義する根拠として用いられる。もちろん「仁」を「愛」と解釈するのは間違ではない。ただ問題は、それが一部分的な解釈に止まることにある。すなわち、「仁」が確かに「愛」という意味を持っているとしても、それが仁の完全な定義ではないということである。このように言える根拠は、樊遲の二番目の質問に対する孔子の答えで見つけることができる。孔子は「知」に対する弟子樊遲の質問に「人を知ることだ」と答えている。「人を知ること」が、「知」に対する完全な定義ではないという点から見れば、前節の「愛」も同様、仁に対する完全な定義になるには十分ではないことが判明する。孔子は普段弟子の質問に対し、一律的な内容で答えず、各自の特殊性と学問の成就水準を考慮して答えを提示した。そしてその答えは、学問的な定義ではなく、実際の生活で活用できる実践徳目が主になっていたのである。このような状況から見ると、樊遲の質問に対する「人を愛する」という答えは、仁の定義に近接してはいるものの、普遍的定義ではなく、樊遲の性向と水準を考慮した一つの具体的な実践徳目だと言うことができる。

宋代の儒学者たちは「愛」が、「仁」の定義になるには十分ではないと考えていた。彼らの思想体系の中で「仁」